糸と女——紡がれる物語

平芳裕子
神戸大学大学院准教授

女性の家庭内における「影なる仕事」であった裁縫は、賃金を得るための「労働」へと位置づけを変えた。しかしそのイメージは、今なお女性性とわかちがたく結びついているようだ。

図Ｉ：「私室」*Godey's Lady's Book*（1843年）より。レディの教養を示す品々。右下に作りかけの刺繍（図は部分）

図2：「お針子賃金」*Punch*（1849年）より

刺繍と裁縫のあいだに

手芸といえば刺繍や編み物などさまざまな手仕事が含まれるが、ここでは特に「裁縫」を取り上げてみたい。というのも西洋の歴史において、手芸と裁縫は同じ針仕事でありながら、しばしばまったくレベルの異なるものとしてとらえられてきたからだ。例えば、刺繍はどうだろう。刺繍を刺すとは、幼いころから刺し方を家庭で習い、実際に刺すための時間的・経済的余裕があり、素敵な作品を仕上げるための才能とセンスをもっているということ。つまり上流階級のレディのための教養として趣味として、もっぱら見せびらかすためにおこなわれた（図1）。それに対して裁縫は、女性ならば誰もが身につけているはずの生活技術であった。家族のための服作りから日用品の縫い物まで、かつての家庭には膨大な針仕事が存在した。それらは農婦や主婦の家事労働、もしくは下層階級の賃金労働であり、決してひけらかすようなものではなかった（図2）。日常的なありふれた光景であるか、さもなくば人目に隠れておこなわれるものだったのである。

女性性との結びつき

では、「裁縫」は、いつからどのようにして（刺繍のような）手芸的な価値を達成したのだろうか。糸を紡ぎ、布を織り、服を縫う。これら服作りのための作業が、産業革命によって機械化されるようになってからといえる。紡績機の発明と織機の改良によって、大量の布地が短時間で生産されるようになる。その結果、レディに憧れる中流階級にとっては、ドレスメーカーで服を注文するのは経済的に困難でも、布地は店に溢れており、安く自分で縫うことができるようになる。しかしただ節約のためだけに服作りがおこなわれたのではない。女工やお針子の登場が、家庭内労働であった裁縫を次第に価値ある仕事へと変えた。紡績工場や織布工場で機械を操作するにしても、あるいは家のなかで内職の針仕事をするにしても、それらはすべて「賃金」を得るための労働であって、家族や自分のために主婦がおこなう「女性の仕事」とは厳然と区別されたのである。

もちろん、今の社会で服作りや裁縫を「女性の仕事」などと決めつけることはできない。しかし、歴史的には女性たちがそれらの仕事に携わってきたことは事実である。途中でやめてもすぐに再開できる単純作業が多いことから、家のなかで育児や家事をおこなう女性たちに適した仕事ととらえられてきたのだ。そして、そういった歴史の残像は、じつのところ、現代日本を生きるわたしたちの身近なところでも見ることができる。少し前になるが仕立屋を主人公とした映画「繕い裁つ人」（二〇一五年）が公開された。原作でも映画でも、「仕立屋」は街の喧騒を離れて一人静かに服を縫うのだが、主人公は「女性」であった。それも「女性らしさ」をことさら強調するように長いスカートをはいている。映画のなかで主人公が仕立てた服のデザインは、大手の手芸店でも紹介されて話題を呼んだ（写真1）。手芸店を訪れる女性たちは、「心を込めて服を縫う」主人公の姿に自らを重ね合わせたにちがいない。裁縫や手芸は、現代においても女性性のイメージと強力に結びつけられているのである。

写真1：手芸店の売り場に展示された映画「繕い裁つ人」の衣装デザイン

ヴィーナスが手にするものは

では逆に、古い例をひとつ。読者の皆様は「ミロのヴィーナス」をご存じのことと思う（写真2）。この古代ギリシャ彫刻は、一九世紀に両腕が欠けた姿で発見されて以来、「リンゴを手にしていた」とか「衣を押さえて恥じらっていた」など、さまざまな姿が想像されてきた。しかし考古学者のエリザベス・バーバーによれば、ヴィーナスの筋肉組織を分析してみると、そのような姿は考えられないそうだ。ヴィーナスは、左手で糸巻き棒を高く掲げ、右手で糸と紡錘を操っていた、というのである。ヴィーナスとは愛の女神であるが、この古典的女性美の象徴が、何か新しいものを生み出すように糸を紡いでいた、とは何とも示唆に富んだ解釈ではないだろうか。女性たちは、もはや紡いだり織ったり縫う必要はないのだが、私たちの社会はいまだに「糸と女」の物語を紡ぎ続けているのだ。

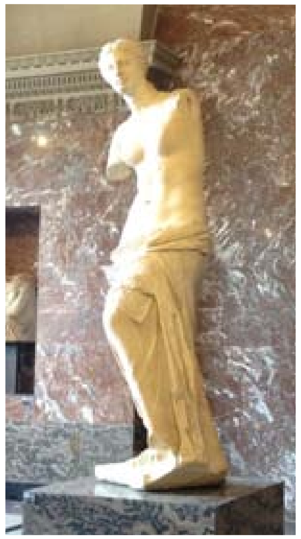

写真2：《ミロのヴィーナス》前3-前1世紀、パロス大理石、ルーヴル美術館